

九州支部主催シンポジウム 「安心して住める場所をいかに定めるか—立地適正化計画と水害対策」

趙 世晨 九州支部長・九州大学 教授

近年、水害をはじめとした自然災害が頻発・激甚化しており、九州地方でも多くの地域に深刻な被害をもたらしている。一方、人口減少に伴い、多くの都市では市街地の人口密度が低下する状況に対して、道路や上下水道といった社会基盤の維持と効率的な行政運営を支える必要のために市街地のコンパクト化とまちなかの魅力向上も求められている。令和2年には、都市計画法・都市再生特別措置法が改正され、災害ハザードエリアを踏まえた防災まちづくりを目的とした様々な制度が定められた。都市のコンパクト化を推進する立地適正化計画の立案においても、新たに防災指針の作成が求められるようになった。

令和2年度、九州支部主催のシンポジウムでは、「安心して住める場所をいかに定めるか—立地適正化計画と水害対策」をテーマに、令和3年2月17日（水）午後オンラインにて開催し、全国から約160名の参加を頂いた。支部長である私の主旨説明の後、以下の講演及びディスカッションが行われた。

●講演1「立地適正化計画と防災指針」

国土交通省九州地方整備局 田中耕介氏

●講演2「事例紹介1：福岡県久留米市」

久留米市役所 松尾毅輝氏・若島洋佑氏・湯口秀隆氏

●講演3「事例紹介2：宮崎県日向市」

日向市役所 松葉進一氏・野崎暖生氏

●ディスカッション

パネリスト：上記講演者、九州工業大学 吉武哲信教授

コーディネーター：九州大学 黒瀬武史准教授

最初の登壇者である国土交通省九州地方整備局の田中氏には立地適正化計画制度、令和2年度都市計画再生特別措置法の改正、防災指針、立地適正化計画策定に関わる国の支援制度について紹介頂いた。その中で、都市計画区域指定や区域区分（線引き）、開発行為規制、都市計画事業により、郊外のスプロール化の抑制、効率的な都市基盤整備を実施する都市計画に加えて、都市再生法に基づく立地適正化計画では、都市計画の規制を前提に、規制緩和、税財政支援等の誘導手法により、まちなか・公共交通沿線に住宅、医療・福祉、商業等の機能の立地を誘導し、都市のコンパクト化を進めるものであり、令和2年12月末時点で全国347都市が計画を作成・公表したと紹介した。一方、頻発・激甚化する自然災害に対応するため、災害ハザードエリアにおける開発抑制、移転の促進、立地適正化計画の強化など、安全なまちづくりのための総合的な対策を講じる必要があり、特に災害レッドゾーン

における開発の原則禁止、市街化調整区域の浸水ハザードエリア等における開発許可の厳格化における制度の変更点について解説した。また、防災の観点を取り入れたまちづくりを加速させるため、立地適正化計画の記載事項として、新たに居住誘導区域内の防災対策を記載する「防災指針」を位置付け、コンパクトシティの取組における防災の主流化を推進することとし、令和2年度は「防災指針」を作成する全国17都市を防災コンパクト先行モデル都市として重点的に検討・支援していることなどを紹介し、「防災指針作成のためのガイドライン」について詳しく解説した。さらに立地適正化計画策定に関わる国の支援における各事業の概要を説明した。

続いて、事例紹介1では、久留米市役所の松尾氏、若島氏、湯口氏は久留米市の浸水被害状況、「防災指針」策定に向けた取り組みなどについて紹介した。その中で、マクロとミクロによる災害リスクの分析方法、そして分析結果の見える化の手順に加えて、市民・企業・行政が共に地域の災害リスクを認識・共有し、基本目標達成のための施策を総合的に展開し、災害リスクの回避・低減につとめる環境が整った災害に強いまちづくりを推進するなどの防災まちづくりの将来像及び今後の取組方針と実施プログラムを紹介した。事例紹介2では、日向市役所の松葉氏、野崎氏は日向市の都市計画、市が抱える4つの災害リスク、居住誘導区域の設定プロセス、特に津波をはじめとする災害リスクの分析結果と課題、そして今後の取り組みについて紹介した。

ディスカッションでは、1)九州の地方都市では、立地適正化計画の策定はまだ十分浸透していないという状況の中で、市街地のコンパクト化を推進しながら、立地適正化計画における防災指針の主流化をどのように図っていくか、2)総合的な対策としての防災指針を策定する際、現状分析や将来予測などに必要な都市情報・データの整備はどのように効率的に行うか、3)自治体による災害リスクの把握及び防災基準の策定はどうあるべきか、4)グリーンインフラの導入の状況及びその考え方、5)全国17の防災コンパクト先行モデル都市はどのように各都市の独自性を展開するか、そして何が期待されているか、6)防災指針における合意形成を長期的なタイムスパンで図っていくことの重要性について、議論が交わされた。